明治時代の名人（中期以降）

攝津大掾

明治淨瑠璃史上の代表的太夫として、品位ある美音を以て鳴る。

明治十六年文樂座櫓下となり、三十五年九月攝津大掾の號を小松宮殿下より賜り、翌三十六年五月改名披露。大正二年四月引退。此間實に三十年文樂座の牛耳を執る。

大正六年十月歿（八十二歳）

天保七年三月順慶町の實家塗物問屋に生る、養家は大工職（釣鐘町に在り）初め三味線彈き後ち太夫となり江戸にて修行、天來の美音愈々音曲的になり、大阪に歸來、文樂座出勤（慶應元年）明治三年早くも切場を語る、昇進頗る早し（三十五歳）

天運此人に幸ひして、明治初年以來大家續々死歿し、十年に春太夫湊太夫死し、十一年强敵古靱慘死、山四郎（山城大掾のこと）死十六年强敵六代綱太夫歿、住太夫引退　十七年强敵八代染太夫死　團平引退、十九年五代彌太夫退座、遂に呂、津、時敵にあらず、越路一人天下となる。文字、南部、路、七五三等皆其門下なり。

十八番物は『先代御殿』『中將姫』『酒屋』『新口村』『七ツ目おかる』『朝顔宿屋』『十種香』『妹脊山竹雀』晩年聲潤稍衰へたりと雖も、情を語るに傾きて艶消しの美音となる。

人格圓滿溫厚、よく門下を愛し、利慾に薄く、晩年書畫に長ず。

四代住太夫

紀州田邊の人。盲人の美音家として知らる。初め三味線彈より出身後ち太夫となる。彦六座櫓下に据る。性來カンのよい人、初日の前に弟子に本を讀ませて、たいてい三度ぐらひで覺え込むといふ記憶力をもつてゐた。人力車で住吉に參詣、汗になつてフー〳〵云つ

てゐる車夫の息づかひを聞きながら、沼津の平作の心持をさぐつてゐたといふ。凝り性で、一面は洒落者。

得意物は、『鳴戸十郎兵衛内』『大文字屋』『葛の葉』『和田合戰』『爪先鼠』『梅由聚樂町』『長局』『朝顔宿屋』等。

五代　彌　太　夫

名人長門太夫の秘藏弟子。

大阪堀江に生れ、六七歳頃より稽古を始め、十歳頃より子供淨瑠璃や首振り芝居の座長として諸國を廻る。明治四年文樂座へ出勤、十九年退座。二十七年彦六座再興について櫓下として勤め、三十二年全く引退。後進の教育、新作、新作曲に沒頭した。現在に至る文樂座又は近松座系の太夫三味線の重鎭、多く彌太夫の教へを受く、俗に堀江の大師匠と稱ふ。三十九年歿(七十歳)

中年から惡聲となり、從つて役々の性格を語り、人情を語ることに熱中し、世話淨瑠璃を專門として、澁味、寂び、洒落、輕快の藝風。得意物は、『大安寺』『橋本』『お染久松飯椀』『帶屋』『吃又』『八百屋』『鎌腹』『沼津』『岩井風呂』『赤垣』等。

溫厚篤實、謙讓無欲、嘘を云はぬ人。文才あり。

辛辣なる。批評家名人團平は、攝津を八重櫻、彌太夫を山櫻に譬へた。

三代　津　太　夫（後ち七代綱太夫）

三代津太夫

永く因講會長として斯界の雜多の事件を處理（攝津副會長と共に）圓滿解決を見て皆心服す。

京都烏丸高辻の實家鳥松（小鳥屋）に生る。十八歳より修行。明治九年十月文樂座に入る

攝津の艶物に比し、世話語りとして名物となる。得意物は、『沼津』『湊町』『忠臣藏四段目』『質店』『酒屋』『兵助』『鰻谷』『堀川』『橋本』殊に明治初年初冬の頃下阪の際、アテ節の多い『日吉丸三段目』を自暴氣味に語り散らして、而かも特長を出してこれを流行させ　『湊町』など丶共にすたり物を復活させた功蹟。

溫順で上品な樂天家。滑稽奇才に富んで、愛嬌があつた。十八番の日吉丸で『ほとけ樣ま

で無理いふて――をかみゆうて、とやつて大笑ひを買つたのも平氣で語り終つた呑氣さ、樂屋中では綽名を『お公卿樣』歌舞伎見物が飯より好きで、批評が奇想天外だつたといふ。

大阪にコレラ流行の時、五代彌太夫は本名傳次郎だから、お公卿樣はこれにからかつて傳染病を利かして『傳ちやん〳〵』と呼んで盛んに嫌がらせる。奇才では負けてゐぬ彌太夫が、今度『源助』といふ流行言葉の出來たとき、お公卿樣の本名が櫻井源助だから、すぐに津太夫を呼ぶのに、『源助さん〳〵』と態と仰山らしく云ふので、遺がのお公卿さんもこれには詫びを入れた。

初代呂太夫

初代呂太夫

明治七年頃から舞臺の人となる。呂篤と名乘つた素人からの出身。通稱『はら〳〵屋』と呼んでゐた。大音强聲で大物語りの名を揚げた。攝津、津、に次での立物。得意物は、『信仰記是齋屋』『竹中砦』『志渡寺』『又助住家』『熊谷陣屋』『逆櫓』『茶屋場の平右衛門』。

明治四十年歿。

五代組太夫

五代組太夫

京都の生れ。豆腐屋。

明治八年文樂座へ出勤。各座へ轉々して、十七年稻荷彦六座に入る。柳適、大隅等と並んでの重鎭。キビ〳〵した藝風が最負を呼ぶ。

豆腐屋の頃『トーフー〳〵』と呼ぶ聲が既に太夫聲になつてゐたといふ。太い底力のある大聲、呂太夫と違つた點は、呂が大海の如き茫洋たる大音とすれば、組は理性的內容的で、山鳴りの襲ふやうな强調、藝の力は呂以上だつたかも知れない。

得意物は、『伊賀越岡崎』『御所櫻』『熊谷陣屋』『二代鑑』『妹脊の大判事』『尼ケ崎』『信仰記』『天下茶屋』『阿漕』等。

三代 大隅太夫

大阪順慶町木嶋屋と呼ぶ鍛冶職に生る。

八九歳の頃より稽古　明治五年太夫となり主として彦六座系の芝居へ出勤、後ち文樂座に入る。常に頭梁の位置にあり。文樂の攝津越路等と對立して斯界の覇を稱す。

大正二年七月三十一日臺灣にて歿す。（六十歳）

若年の頃、好男子が累して女色の爲め病を得瀕死の重體となつたが、快復後顏の醜化したのが却つて發奮の動機となつて、遂に名人の域に達す。

上品で溫柔な明治時代の名人の中にあつて、奔放不羈な慧星的一人物。而しながら、淡泊單純にして我執歸く、定見のない爲め屢々出所進退を誤つてゐる。數奇な運命に操られて晩年悲慘なる死を遂げるに至るところ、藝術家的天才肌と併せて客觀的には興趣ある人物淡々たる中に山あり川ある寫實的表現の妙味一特色なり。

得意物は『合邦』『志渡寺』『日向嶋』『壺坂』『堀川』『尼ケ崎』『野崎村』『伊賀越岡崎』『熊谷陣屋』『忠九』

歌舞伎かぶれは大毒だ、といふ見地から芝居を見ることを大禁物としてゐたなど、殊にこの人らしい一見識である。

三代 越路太夫

堺の八百屋（八百久）に生る。八九歳の頃から、やかまし屋の團七について猛烈な稽古をした。後に攝津大掾の秘藏弟子として愛育され、文樂出勤以來漸次精進して、後年大掾の後を襲ふて櫓下となる。大正十三年三月歿。（六十歳）

奔放な性格で、師の勘當を受けたこと、三十幾回といふほどであつたが、大掾の品格に次第に柔化された傾向があつた。越路のヅボラは知れ渡つたものだつたが、愛弟子でもあり、有望な藝格を惜しまれるのあまり、仲介する人さへあれば、そこに首が繋がれたのだ。晩年の越路述懷して曰く『私には幾つ首があつても足りなかつたのでした……』

藝風は若年の頃、澁い世話物を得意とし、彌太夫畑と云はれたが、中年から一變して、本來の澁味へ攝津の艶を加味し、極めて健實な語り風で一家を成し、攝津歿後の文樂を背負つて立つた。

得意物は、『合邦』『太十』『酒屋』『二十四孝勘助内』『寺子屋』『和田合戰市若切腹』『布引鳥羽離宮』『長局』『紙治内』『熊谷陣屋』修行時代の烈しい稽古は、彼れの額に師匠團七に撥で擲られた古疵によつて知られる。

三代 豊澤團平

大阪玉造の傘屋に生る。九歳から三味線の稽古を始め、名人團平について修行、始め仙左衛門と稱へ後ち團平を襲名した。

負けぬ氣の一徹な人、彦六座で强腹の組太夫の合三味線となり、八陣の毒酒で力の競爭をして彈き負かしたが、組太夫も又躍起となつて次興行の『二十四孝勘助住家』で强音にさらに張りを持たして語つたが、團平も負けてはゐない、もう一度彈き負かさうと努力した爲めに遂に肋膜炎を起して倒れたといふ話がある。

高安月郊氏の『櫻時雨』や『大江山の戻り橋』『雪中行軍』『乃木大將』それ他多くの作曲を試みてゐる。太夫は勿論、三味線彈きでも節付けの出來るものは實に尠なかつたのである。

第十條　同盟中開議開設ノ際ハ議員中ヨリ幹事十二名ヲ選擧ス而シテ其十二名ハ檐下太夫ノ名目ヲ有スル者ニ限ベシ

第十一條　三絃頭附ノ名目アルモノハ都テ同盟中議員タルノ權利ヲ有スルモノトス

第十二條　同盟中未ダ藝業熟達セザルモノ或ハ修業中ニシテ營業ヲ爲サヾルモノハ其師タルモノヨリ取締ニ申告シ其修業中タルノ證ヲ受クルモノトス

第十三條　演劇場又ハ町席等ニテ營業ノ約ヲ爲シ給金手附等ヲ受取ルトキハ事故アリテ其演劇ノ開業延期ナストモ興行人ニ斷リナク他ノ演劇町席等ニテ營業スルヲ許サズ

但シ示談承諾ノ上ハ此限ニアラズ且ツ興行人ニ於テモ謂レナク延期シテ三業者ノ差支ヲ生ゼザル樣兼テ約定ヲ爲シ置クモノトス

第十四條　同盟中一人一己ノ私意ヲ縱シテ或ハ傳來ノ俳號ヲ猥リニ唱シ或ハ仲間一般ノ妨ゲトナル程ノ所業ヲナスモノアルトキハ取締ニ於テ懇々敎誡スベシ而シテ猶若其行ヲ改メザルモノハ議員中協議ノ上同盟仲間中一座爲サヾルヲ約シ且其事柄ニヨリテハ其筋ヘ申告シ鑑札返上セシムルコトアルベシ　（後略）